

日本経済新聞

がん大国・日本の姿 働く患者は増加、対策で課題山積



2026年が始まりました。今回はがん社会・日本の現状を、改めておさらいしたいと思います。

日本人の男性は3人に2人が、女性の2人に1人ががんに罹患（りかん）します。がんは細胞の老化といえる病気で、超高齢社会のフロントランナーである日本が世界トップクラスのがん大国になるのは当然です。

欧米と比べると日本は高齢化の進展があまりにも速く、がんの爆発的な増加に対策が追いつけませんでした。受動喫煙や加熱式たばこへの対応、がん検診受診率の低さ、手術偏重の治療、医療用麻薬の使用量の低さなど、課題が山積しています。

欧米と異なり若い移民を受け入れてこなかったため、高齢者も働く必要があります。働く人になんがが多発するのは、我が国に特徴的な姿です。

男性が55歳までにがんにかかる確率は5%もありません。そのため、男性社会で定年が早かった頃の日本の会社は、がんとは縁遠かったのです。

65歳までの発がんリスクは男性で13%、女性では15%を超えます。年金の支給開始年齢が70歳に引き上げられるのは時間の問題かと思いますが、この年齢までにがんになる確率は男女とも2割前後です。皆が70歳まで働くようになれば、働く人の5人に1人ががん患者になる計算です。

現在、新たにがんと診断される日本人は年間約100万人です。がん罹患患者数は40年ごろに史上最多に達し、年間105万人を超えると予想されています。人口減によってがん予備軍の人数は減りますが、それ以上に高齢化の影響が患者数を増やすのです。

日本人の年間死亡総数も同様に、40年ごろにピーク（170万人弱）を迎えます。40年以降は人口減少の効果が上回り、がん患者数も死亡数も減少に転じると予想されています。

がんの種類も時代とともに変化します。かつて日本のがんの代表だった胃がんの減少が顕著です。私が生まれた1960年（昭和35年）当時、男性のがん死亡の52%、女性の38%が胃がんによるものでした。24年時点で男性が11%、女性は8%まで低下しています。

胃がんの原因のほとんどが、免疫系が完成する6歳ごろまでのピロリ菌感染です。80歳以上の感染率は8割に上りますが、冷蔵庫や水道の普及を受けて20歳以下はわずか5%程度です。胃がんは今後さらに激減するでしょう。

胃がんは手術向きのがんの代表で、放射線治療を受ける患者はほとんどいません。胃がんを除く多くのがんで、放射線治療は手術と同程度の有効性を持ちます。したがって40年に向けて手術は減り、放射線治療が増える方向です。

2026年1月7日